写真出典略号一覧

a：朝香宮渡欧写真（個人蔵）
b：朝香宮渡欧アルバム（財団法人鍋島報效会蔵）
c：朝香宮渡欧写真（財団法人鍋島報效会蔵）
d：自動車事故関連記事スクラップ帳（個人蔵）
e：朝香宮旅行アルバム（当館蔵）
f：南仏方面旅行アルバム（個人蔵）

＊本冊子は、朝香宮夫妻が撮影した写真を中心に構成しました。
各写真の出典については、キャプション末尾に上記略号を（ ）で表記してあります。

謝辞：

本展の開催および冊子の制作に際し、以下の機関・個人の皆様より
多大なるご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。（敬称略）

大村美術館
財団法人北澤美術館
財団法人鍋島報效会
文化学園服飾博物館

株式会社 富士鳥居

朝香誠彦
大給湛子
菊池吉晃
坂本美乃子
広岡裕児

2010年12月11日(土)—2011年1月16日(日)

東京都庭園美術館
TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

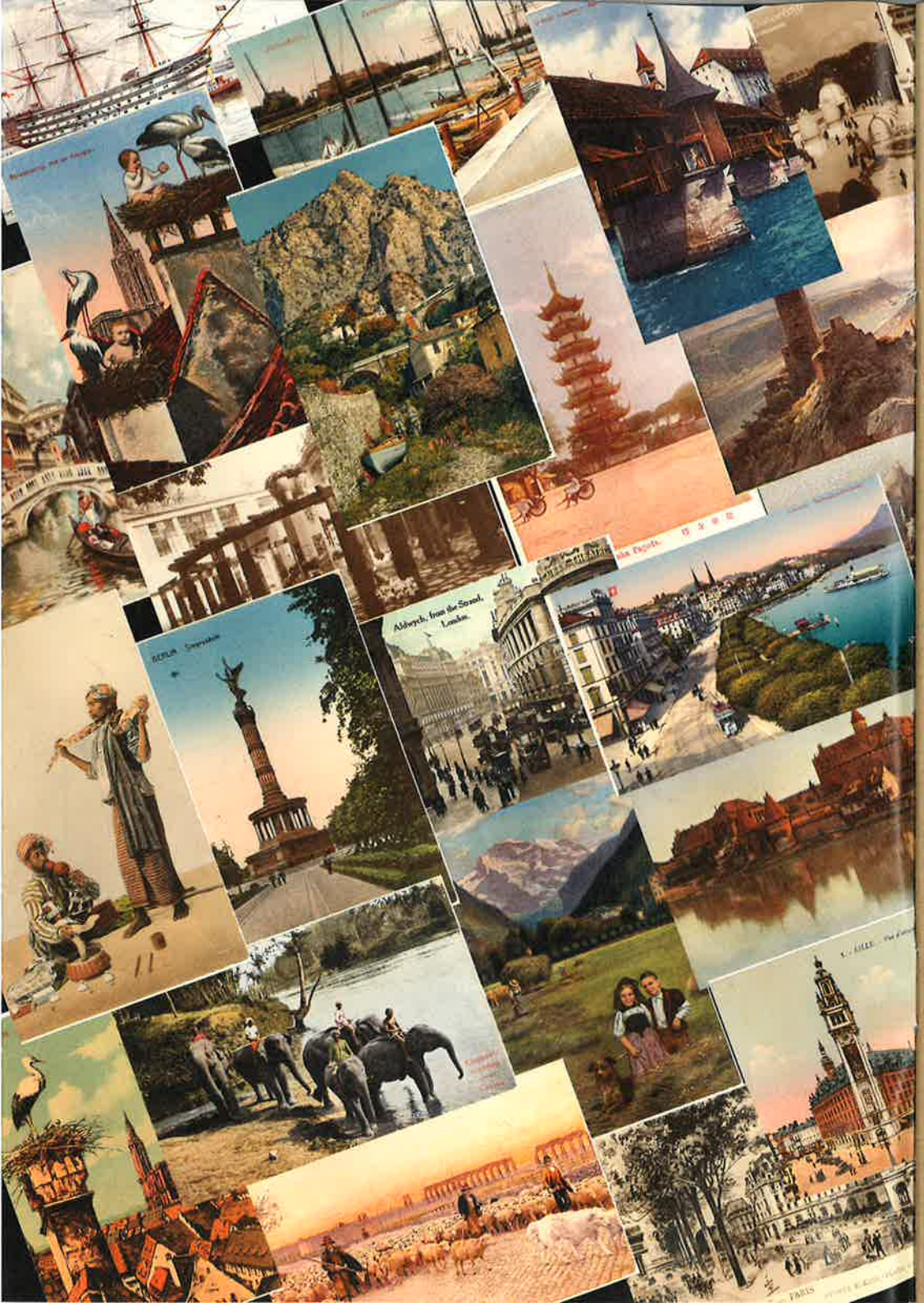
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
後援：東京都
年間協賛：戸田建設株式会社　東京ガス株式会社
企画・編集：牟田行秀［東京都庭園美術館］
デザイン・制作：垣本正哉［D_CODE］
©東京都庭園美術館 2010

表1：自動車旅行中の朝香宮鳩彦王（左）と允子妃（右） 1924-25年 (c)
表2・3：鳩彦王が日本の家族に向けて送った絵はがきなど（個人蔵）

東京都庭園美術館特別公開

朝香宮のグランドツアー

THE GRAND TOUR OF PRINCE ASAKA



①

朝香宮鳩彦王の渡欧

Prince Asaka left for Europe to study

かつて英国貴族の子弟たちは、学業の総仕上げとして数ヶ月から数年に及ぶ海外への大旅行「グランドツアー」を経験しました。多くの場合、その目的地は当時の文化的な先進地であったフランスやイタリアであり、身の回りの世話をする御用掛や家庭教師を同行しての大がかりなものでした。彼らはこの旅行で異文化や芸術に触れるとともに、現地の上流階級との交流を通じて、一人前の英国紳士・淑女へと成長していったのです。

1922年（大正11）10月30日、当時35歳の朝香宮鳩彦（やすひこ）王（1887－1981）は「軍事御研究」の名目で家族を日本に残し、欧州へと旅立ちました。明治期以来、「国家有用」となる技術や新知識の吸収を目的とした、皇華族の渡欧が慣例化していました。鳩彦王の渡欧は名目上は軍事研究のためとされましたが、実際には皇族の一員として見聞を広めるとともに、現地の王族や貴族との文化的交流を目的としたものでした。随行員として藤岡御付武官と元学習院英語教授の稲葉御用掛を伴った鳩彦王の渡欧は、まさに"朝香宮のグランドツアー"とも言うべきものでした。

鳩彦王は特別列車で東京を発ち、門司から日本郵船の伏見丸に乗船、フランス・マルセイユに向けて遥かなる旅に出発しました。当時発行された日本郵船の欧州航路時刻表によれば、鳩彦王を乗せた伏見丸は途中上海、香港、シンガポール、コロンボ、スエズ、ポートサイド、ナポリに寄港したと思われます。鳩彦王は初めて目にする寄港地ごとに、その感想を記した絵はがきを日本の家族へと送っていました。

12月中旬、マルセイユに到着した鳩彦王は、次いで鉄路でパリ入りしました。当時、パリにはすでに鳩彦王の従兄姉夫妻である北白川宮成久（なるひさ）王と房子妃、実弟の東久邇宮稔彦（ひがしくにのみやなるひこ）王が暮らしていました。彼らは皇族でありながら、敢えて「伯爵」を名乗っていました。北伯爵に東伯爵です。これは皇族の海外留学時の慣例として広く行われていた手法で、相手国に対して皇族訪問の正式な対応を求めずに済み、現地での警護や外交儀礼も大幅に簡略化されるというメリットがありました。何より、皇族本人にとっては堅苦しい身分から解放され、旅行中は一個人として柔軟なスケジュールが組めるという点は魅力であり、鳩彦王もこの慣例に従って、滞欧中は「朝伯（コント・アサ）爵」を仮の名前として使用しました。

パリ到着後、凱旋門近くのホテル・マジェスティックに部屋をとった「朝伯」は、年末年始の喧噪を避けて、北伯夫妻とともにスイス・シャモニーへと向かいました。鳩彦王が日本の家族へと送った絵はがきには、この時の様子を「私ノ様ナ田舎者ハ服ヤ其他ノ関係テ新年ヲ巴里テ迎ヘル事カ出来ナイソレタカラ都落シテシヤモニクスニ来テ新年ヲ迎ヘマシタ……」と書き送っています。ユーモアが利いた表現の中にも、第一次世界大戦後の好況に沸き、後にレ・ザネ・フォル（Les Années Folles　狂乱の時代）と呼ばれた当時のパリの華やかな様子を窺うことができます。

旅行から戻った鳩彦王は、パリ16区のヴィクトル・ユゴー広場に隣接した、マラコフ街88番地の閑静なアパルトマンの最上階を借り受け、ここを新たな住まい—通称「マラコフ御殿」—としました。ブーローニュの森にほど近く、閑静な高級住宅街として知られるこの一帯には、北伯夫妻も居を構えていました。

欧州航路をマルセイユに向かう途中で寄港したエジプトにて(a)

1

3

4

2

5

1 出発に際して報道機関に提供された朝香宮鳩彦王と家族の写真(a)
2 特別列車に乗って門司港へと向かう鳩彦王と見送りの允子妃(b)
3 鳩彦王が乗船した日本郵船伏見丸の絵はがき(部分:個人蔵)
4 鳩彦王が撮影したスフィンクスとピラミッド(b)
5 スイス・シャモニーにて鳩彦王が撮影した北白川宮成久王夫妻(c)

Column 01

ヴィクトル・ユゴー広場

夫妻が撮影した当時のヴィクトル・ユゴー広場(e)

朝伯夫妻が生活の拠点としたヴィクトル・ユゴー広場は、今日でも高級住宅地として知られるパリ16区の閑静な住宅街の中に位置しています。凱旋門から南西に伸びるヴィクトル・ユゴー通りを500メートルほど歩くと、やがて正面にロータリー状の大きな広場が見えてきます。夫妻が住んでいた当時は広場の中央に彫刻が据えられ、人々の憩いの場となっていました。「マラコフ御殿」があったマラコフ街88番地(現在はレイモン・ポワンカレ街と改称)は広場からほんの数十メートルしか離れておらず、夫妻も広場の喧噪を日夜耳にしていたことでしょう。この一帯は、90年近くたった今日でも、夫妻が生活していた当時の姿を比較的よく留めています。

② 自動車事故の発生と允子妃の渡仏

The traffic accident occurred and Princess Asaka hastened to France

1923年(大正12)4月1日、鳩彦王は北伯成久王夫妻からドライブに誘われ、目的地を知らされぬままに車上の人となりました。成久王と房子妃、鳩彦王、房子妃御用掛のエリザベート・ソヴィー嬢を乗せた成久王所有のアヴィヨン・ボワザン(ボワザン飛行機)製の高級リムジンは、御付運転手のヴィクトール・デリアの運転でパリ北西部のノルマンディー地方へと向かう道を快適に飛ばし、途中エブルーの街に立ち寄って昼食を済ませました。

昼食後、デリア運転手に代わってハンドルを握ったのは成久王でした。ドライブが好きな成久王は運転免許を取得済みで、自らハンドルを握ることも決して珍しくはありませんでした。成久王が運転する排気量3970ccのボワザン23cv型リムジンは、海岸沿いの保養地ドーヴィルへと続く国道13号線を、矢のような速さで疾駆し続けます。当時の報道によれば、隣に座るデリア運転手が速度計をのぞき込んだ時、針はすでに時速100キロを越えていたということです。そして、一行がパリから北西に100キロあまり離れた小さな村、ペリエ・ラ・カンパーニュ付近にさしかかった時のことでした。

両側にアカシアの並木が続く未舗装の道の前方に、やがて一台の先行車が見え始め、その姿がたちまち大きくなってきました。この車を追い越して先を急ごうとしたのでしょう。成久王は対向車線へとハンドルを切り、さらにアクセルを踏み込んで先行車の前方に出ました。そして再び元の車線に戻ろうとした瞬間、バランスを崩した高性能リムジンは大きく傾いたまま、スピードを落とす間もなく路肩のアカシアの樹に激突、大破してしまいました。すべては一瞬の出来事でした……。この事故でデリア運転手は即死し、成久王も間もなくその場で息を引き取りました。一方、房子妃と鳩彦王、ソヴィー御用掛は重傷を負いはしたものの、奇跡的に一命を取り留めて、事故現場近くの町ベルネーのゴンベール病院へと搬送され、応急処置を受けることとなりました。

たいへん痛ましく不幸な事故ではありましたが、後にアール・デコ様式の稀有な建築が日本に残されることとなった契機は、まさにこの瞬間にあったと言ってもよいでしょう。なぜなら、この事故なくしては朝香宮夫妻が揃ってアール・デコ全盛のパリで暮らし、1925年に開催されることとなる「現代装飾美術・産業美術国際博覧会」(アール・デコ博)を見学するチャンスにも巡り会わなかったかもしれないからです。

日本に事故の第一報が届いた時、朝香宮允子妃(1891－1933)は子供たちとともに関西方面を旅行中でした。知らせを聞いた允子妃は、その時「エイプリル・フールの冗談でしょ!」と叫んだと伝えられています。誰の耳にもにわかには信じがたいニュースでしたが、やがて日本でも事故の詳細が次々と明らかになり始めました。

北白川宮家と朝香宮家は、同じ伏見宮家の流れを汲む皇族として従兄弟の関係にありました。明治天皇の第8皇女であった允子妃(富美宮允子内親王)にとって、事故に遭った北白川宮房子妃(明治天皇第7皇女:周宮房子内親王)は、義理の従姉であるとともに、実の姉でもありました。允子妃は鳩彦王と房子妃の看護のため、まだ幼い子供たちを日本に残してパリへと旅発つことを決心しました。

1923年(大正12)4月下旬、允子妃を乗せた日本郵船箱崎丸は、半年前に鳩彦王がたどったばかりの欧州航路を、一路マルセイユへと向かいました。

允子妃も鳩彦王と同じように、日本の子供たちに向けて寄港する先々から

事故に遭ったボワザン23cv型リムジンのラジエーターグリル(当館蔵)

絵はがきを出しています。電子メールはおろか、国際電話さえも存在しなかった当時にあって、絵はがきはお互いの消息を知らせ合う大切なコミュニケーションツールであると同時に、旅先の珍しい文化や習俗、時には空気感さえも伝えてくれる百科事典のような存在でもありました。

「私たちの船はもう七日間航海をつづけました（…）もうそろそろあつくなるので甲板でくらさなければなりません 今日朝の中に台湾海峡から出てひろびろ海に出たのです しかし昨日あたりから山はもとより島一つありません 波また波の大洋の中央をはしりつづけて居ります」（1923年5月8日）

1

4

2

5

3

6

7

8

10

9

11

1-3 事故直後に撮影された現場の写真 (d)
4 事故を報じるフランスの新聞紙 (d)
5 現在も事故現場に立つ北白川宮慰霊碑
6 ペリエ・ラ・カンパーニュ村の小教会 (c)
7 アルトマン病院に入院中の鳩彦王 (c)
8 鳩彦王を診たアンリ・アルトマン医師 (c)
9 鳩彦王を担当した日仏合同の医療チーム (b)
10 病室での鳩彦王と允子妃 (b)
11 事故直後に搬送されたペルネーのゴンペール病院 (d)

12

13

14

15

16

12 允子妃が撮影したエッフェル塔(b)
13 リハビリを兼ねて"ボア(ブーローニュの森)"を散策する鳩彦王(b)
14 允子妃が撮影したパリの子供たち(b)
15-16 ブーローニュの森・アンフェリュール湖畔にて

Column 02

北白川宮房子妃

アルトマン病院で療養中の北白川宮房子妃(左)と允子妃(c)

鳩彦王と同じパリ・ヌイイーの病院で療養生活を送っていた北白川宮房子妃は、傷が癒えると同時に単身帰国の途に就きました。マルセイユと香港から允子妃に宛てて発信された絵はがきには、パリの街で「北伯夫人」として暮らした夢のような日々を懐かしみ、皇族の一員として現実の生活へと戻っていく寂しさが切々と綴られています。その姿は、パリで快活な日々を送る允子妃とはとても対照的です。

「汽車が走り出すにつれ遠ざかるなつかしい巴里　ああ……もう魂になっての後でなければ見る事も出来ぬ巴里……」1924年1月5日

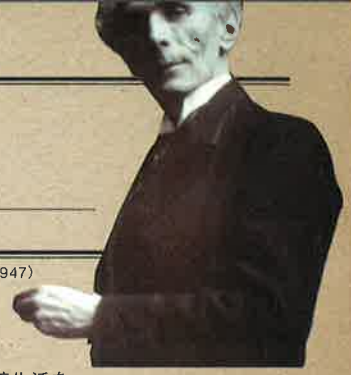
「もう一週間でいよいよ東洋の一孤島……巴里の暮らしは夢の内に過ぎてもとの井戸へ入るのです……」1924年2月3日

帰国した房子妃は、その後の激動の時代を力強く生き抜いた姿から「房子大妃」と讃えられ、事故から半世紀後の1974年(昭和49)にその生涯を閉じましたが、二度とパリの地を訪れることはありませんでした。

③

「朝伯」夫妻のパリ生活

A full life of Count and Countess Asa in Paris



イヴァン=レオン・ブランショ(1868－1947)

1923年(大正12)6月10日、允子妃はパリに到着しました。この時鳩彦王はパリ・ヌイイーにあるアルトマン病院に転院し、外科の権威であったアンリ・アルトマン医師による当時最新の治療を受けていました。一時は重体であった鳩彦王はすでに危機的な状況を脱し、ベッド上に起きあがって会話ができるまでに回復していました。その様子を見て允子妃も安心したのでしょう。看病に通う日々の生活の合間に、フランス語と水彩画のレッスンを受けるようになりました。

現在、当館には朝香宮夫妻が滞欧中に支払った諸経費の記録、『受領証綴』が残されています。鳩彦王の渡欧から夫妻揃っての帰国までに要した経費の記録であるこの資料を読み解くことによって、二人の日常生活の一端を垣間見ることができます。水彩画のレッスンもそうした日常のひとコマでした。この時允子妃に水彩画を教授していたのは、イヴァン=レオン・ブランショ(1868－1947)というフランス人彫刻家でした。幼少の頃より絵を描くことが好きだった允子妃は、ブランショの指導を受けて描いた静物画など、幾枚もの作品を滞仏中に残しています。このブランショが水彩画を教授することとなった詳しい経緯はわかりませんが、両者の交流は夫妻の帰国まで続いたと思われ、1925年に制作されたブランショ作のブロンズ製允子妃立像が残されています。1933年(昭和8)に竣工した旧朝香宮邸(現東京都庭園美術館)の大広間と大食堂には、ブランショの手によるレリーフと壁面装飾が採用されていることから、フランス人アーティストたちが参加したアール・デコ様式の宮邸の誕生に際して、実はブランショがたいへん重要な役割を担ったのではないかと推測されています。

1923年(大正12)11月30日、医師より退院を許可され、ようやくマラコフ街の自邸へと戻った鳩彦王は、療養とリハビリを兼ねて允子妃とともに近くのブーローニュの森を散策する日々を過ごすようになります。その生活は朝8時の起床から夜11時半の就寝までのスケジュールが細かく定められた、たいへん規則正しく秩序立ったものでした。

夫妻が穏やかな療養生活を送っていた頃、日本では9月1日に関東大震災が発生し、東京・高輪の朝香宮邸も少なからず被害を受けていました。日本からは逐次電報や絵はがきによって東京の被災状況がパリに伝えられましたが、今日のように国際電話やインターネットのような便利な通信手段がなかった当時にあっては、夫妻の不安もより一層大きかったのではないでしょうか。

「私は大層丈夫で毎日病院へ通って居ります 田舎者はいつまでたったってパリー子にはなれませんよ 地震後の東京はどんなですか 私どもには想像はつきません」

『受領証綴』が語る朝伯夫妻の日常生活は、衣・食・住や趣味嗜好に至るまで多岐に渡っています。部屋には常に近所の花屋から取り寄せた生花が飾られ、夫妻の食事や身の回りの世話をする現地雇いの使用人が数名働いていました。外出の際には運転手付きの自家用自動車に乗り、時には「トゥール・ダルジャン」や「メゾン・ブルニエ」のようなレストランで外食をすることもありました。蓄音機やレコードのような生活を楽しく彩る品々を買い求めたり、遠く離れて暮らす子供たちのために絵本や洋服、自転車、楽器などを購入して日本に送ったりもしています。特に夫妻は現地で入手したカメラがたいへん気に入ったようで、外出の際には常に携行して想い出を印画紙に焼き付けていました。夫妻は会心の一枚をアルバムに貼付し、傍らに一言

イヴァン=レオン・ブランショ《朝香宮允子妃殿下立像》1925年 当館蔵

ずつコメントを記入しています。これらは感動を手元に残す手段としてだけではなく、定期的に日本に送られ、家族に近況を知らせるビジュアル日記としても機能していたのでしょう、所々に「面白キトコロハ帰朝（帰国）ノ上ニテ」といった書き込みが散見されます。

当初より重要な渡欧目的となっていた、現地の貴族や有力者との交流も精力的に行われました。残された写真類には、当時日本ともたいへん関わりの深かった銀行家アルベール・カーンや、中部フランス・クルゾーにあった大工場の社主シュナイダーとともにファインダーに収まった夫妻の姿や、かつて北白川宮家とも親交のあったユゼス侯爵夫人に誘われての宮廷式狩猟宴などに参加する「朝伯」の勇姿が記録されています。ともあれ、パリでの充実した日々について允子妃が「今ハ花ヤ果実ヤ野菜物ノ展覧会ソレカラ秋ノ画サロン等色々ナモノガアリトテモトテモ見物シキレマセン 毎日ビショビショフル雨ノ中ヲ見物ニ出カケテ居リマス」（1924年11月2日）と日本に向けた絵はがきに記しているように、その日常はなかなかに多忙なものでした。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

1 パリの写真館で撮影された鳩彦王ポートレート(c)
2 G.L.マニュエ兄弟《朝香宮允子妃殿下像》1925年 当館蔵
3 パリ19区のビュット・ショーモン公園にて(e)
4 エッフェル塔を散策中の允子妃と杉岡御用掛(e)
5 ユゼス侯爵夫人主催の宮廷式狩猟宴に招かれた朝伯夫妻(c)
6 現地貴族の晩餐会に主賓として招かれた鳩彦王(c)
7 パリのアパルトマンにて御用掛の杉岡・ボナール両女史とともに(c)
8 アパルトマンの一室でくつろぐ允子妃(e)
9 絵はがき「コノ建物ノツツキガ私タチノアッパルトマンデス」（個人蔵）
10 現在のヴィクトル・ユゴー広場
11 今も残るマラコフ街88番地のアパルトマン（最上階が当時の朝伯邸）

12

13

14

15

16

12 夫妻が各地で買い求めたレコード（当館蔵）
13 ルネ・ラリック《硝子製金魚模様花瓶（フォルモーズ）》1924年（個人蔵）
14 帰国時に持ち帰った銀器類（個人蔵）
15 朝伯夫妻の旅行鞄（個人蔵）
16 允子妃がパリで描いた水彩画《グラジオラス》（当館蔵）

Column 03

朝伯夫妻のパリみやげ「御帰朝ノ節御持帰品」

朝伯夫妻は滞欧中に様々なものを購入しています。その大半は今日では失われてしまいましたが、夫妻の帰朝時に持ち帰られたと推測される品が現在数点確認されています。《硝子製金魚模様花瓶》は、アール・デコの時代を代表するガラス工芸家、ルネ・ラリックが1924年にデザインして生産が開始された花瓶、《フォルモーズ》として知られています。夫妻はラリックのガラス工芸品がたいへんお気に入りであったようで、『受領証綴』にはヴァンドーム広場にあったラリックのブティックを訪れ、テーブルセンターピース《火の鳥》とガラス製ペンダントを数点買い求めた際の記録が残されています。この時購入された《火の鳥》は、1933年（昭和8）旧朝香宮邸竣工時に撮影された写真から、殿下居間に飾られていたことが確認されています。《丁抹（デンマルク）國製陶器三羽揃ペリカン》は、デンマークの名窯ロイヤルコペンハーゲン製の愛らしいペンギン型置物です。やはり現地で買い求めたか贈呈されたものと推測され、旧宮邸時代には小客室に飾られていました。これらの品々は夫妻の帰国後に保管用の木箱があつらえられ、品物の名称とともに「御帰朝ノ節御持帰品」と添書きが付されています。当時まだ存在そのものが珍しかった動物を前にして、本品を担当した女官はさぞ悩んだことでしょう。箱書きにはペンギンではなく「ペリカン」と記されました。なんとも微笑ましいエピソードです。

ロイヤルコペンハーゲン製のペンギン型置物と木箱の蓋（協力：株式会社 富士鳥居）

④ フランス人アーティストたちとの出会い──アール・デコ博覧会

Encounter with French artists − The Exposition of Art Déco

ルネ・ラリック（1868－1945）

1925年（大正14）4月から11月にかけてパリ・アレクサンドルⅢ世橋両岸のアンヴァリッド大広場とグラン・パレを会場に開催された「現代装飾美術・産業美術国際博覧会」（通称アール・デコ博覧会）は、絵画や彫刻など純粋美術に対する「装飾美術」の地位向上と、大量生産・消費社会を背景とした新時代に相応しいデザインを提唱する場として、フランス装飾美術家協会が政府に働きかけて実現したものでした。主催国のフランスは、政府をはじめ、百貨店や工房など民間に至るまで様々なパヴィリオン（展示館）を出展し、デザインや工芸の中心地としてのパリの地位の確立と、産業美術の発展に伴う経済の活性化を目指していました。日本を含む22ヶ国による150ものパヴィリオンが立ち並んだ会場内は常に活気にあふれ、多くの見学者たちで賑わっていました。

数ある展示の中でもひときわ目を引いたのは、当時ガラス工芸家としてすでに大活躍をしていたルネ・ラリック（1868－1945）の一連の仕事ぶりでした。ラリックは「ガラス工芸とガラス工業」部門の代表として、博覧会の正門であるポルト・ドヌール（名誉の門）や国立セーブル製陶所館（セーブル館）ダイニングルーム、グラン・パレ内の香水館噴水型オブジェ、アール・エ・メチエ館正面扉など主要パヴィリオンの装飾に関わり、来場者にその存在を強く印象付けていました。中でも会場内最奥部のメインエリアに設けられたラリック自身のパヴィリオンと、高さ15メートルに及ぶガラス製噴水塔《フランスの水源》の展示は、建築関連分野でのガラスの可能性を追究していたラリックの名声を国際的なものとしました。

博覧会で堅実な仕事ぶりを披露していたフランス人アーティストは、ラリックだけではありませんでした。博覧会の主催者であるフランス装飾美術家協会の副会長として博覧会の実現に尽力したインテリア・デザイナー、アンリ・ラパン（1873－1939）です。ラパンは事務局の要職者として博覧会の運営に携わる一方で、政府が出展した「フランス大使館」セクションの装飾にも腕を振るい、応接サロンや大食堂など中心となる部屋の内装を担当しました。また、噴水を象ったタワー上のモニュメントが印象的なセーブル館の中庭デザインを彫刻家ゴーヴネとともに手がけるなど、その活躍ぶりは決してラリックにも劣らないものでした。

この装飾美術の一大祭典を、鳩彦王と允子妃も見学する機会に恵まれたのです。1925年（大正14）7月9日午前11時から約1時間にわたり、夫妻は博覧会場を訪れました。日本の皇族による公式の視察であったため、朝伯夫妻にもこの時ばかりは「朝香宮同妃両殿下」の敬称が用いられています。その様子は現地のニュース映画や新聞紙上でも大きく採り上げられ、今日でもその概要を知ることができます。各種記録によると、朝香宮両殿下はフランス美術局長ポール・レオン氏の案内でグラン・パレ内の展示より見学を開始し、リュールマンの「コレクショヌール館」や「セーブル館」、「フランス大使館」セクションを経て最後は日本館前より自動車に乗って会場を後にしました。フランスのニュース映画会社ゴーモンのアーカイブには、この時の様子を記録した映像が現在も残されています。この貴重な映像に残された允子妃のにこやかな表情は、博覧会がいかに魅力的であったかを物語るようです。夫妻の見学経路上には、ラリックやラパン、そして允子妃に水彩画の指導をしていた彫刻家、ブランショが手がけた作品も展示されていました。この時の出会いが夫妻の帰国後に開始されるアール・デコ様式の新宮邸建設に際して大きな影響を与えたであろうことは想像に難くありません。

アンリ・ラパン（1873－1939）

1

2

3

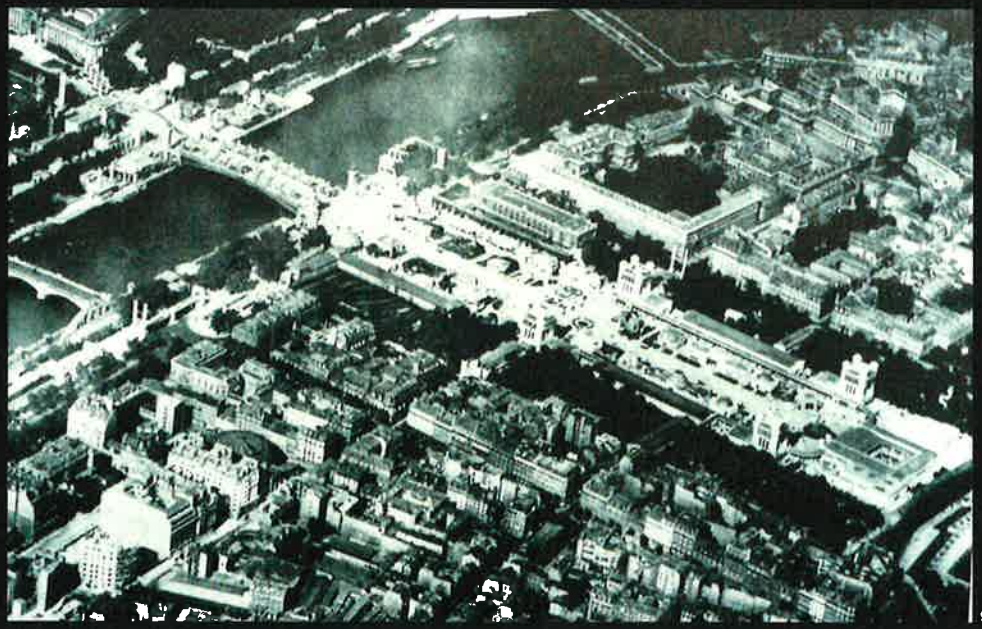
4

7

5

6

8


9

1「朝香宮同妃両殿下」として博覧会の会場を公式視察する夫妻
2 展示館を見学する允子妃と鳩彦王（当時のニュース映像より）
3-6 アール・デコ博覧会の各展示館（パヴィリオン）
7 ラリックのガラス製噴水塔《フランスの水源》（大村美術館蔵）
8 アール・デコ博覧会絵はがき（大村美術館蔵）
9 博覧会会場空撮

⑤

朝香宮のグランドツアー

The grand tour of Prince Asaka

鳩彦王の傷が癒えた頃より、朝伯夫妻は欧州各国の視察旅行へと出発しました。日本に宛てた絵はがきや『受領証綴』に残された地名から推測すると、その足跡は英国、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア、ハンガリーをはじめ、デンマークやノルウェー、スウェーデンなど北欧各国からスペイン、イタリアにまで及んでいます。これらの旅行は鳩彦王の転地療養の一環という意味合いがありましたが、それ以上に日本の皇族として広く世界を見聞するということにより重きが置かれていました。またその行程中に天皇の名代としてオランダのヴィルヘルミナ女王やベルギーのアルベールⅠ世国王ら国家元首との会談を行うなど、皇族本来の役割も果たしています。

今日と異なってまだ旅客機による長距離移動が一般的ではなかった当時、夫妻の移動はワゴン・リー社がヨーロッパ各地に向けて運行していたオリエント急行や、雇い上げの自動車が用いられました。道路事情や天候に左右されることも多かった夫妻の旅行は、数日間程度の短いものから、時には1ヶ月に及ぶこともありました。各都市を訪れた夫妻は、歴史的・文化的な背景の違いによって街や建築にも様々な個性があることに感嘆の声を発しています。ロンドンでは開催中の「大英帝国博覧会」を見学、スイス・アルプスのグリンデルヴァルトでは、互いの体をロープで繋ぎながら、徒歩で氷河を渡りました。水の都ヴェネツィアではゴンドラに揺られ、古都フィレンツェでは「芸術を研究する者は必ず訪問すべき地です。……家の色形なんとなく美術的です」と日本に感想を書き送っています。ローマとナポリは遺跡巡りが中心でした。コロッセオや凱旋門が残るフォロ・ロマーノや、当時も盛んに発掘調査が進められていたポンペイの遺跡を訪れた際の写真が残されています。関東大震災によって首都東京は壊滅的な被害を受けたという報告を受け取っていた夫妻は、かつてポンペイの街を一瞬にして飲み込んだヴェスヴィオ山の火口を訪れた際に、どのような感想を抱いたのでしょうか。

朝伯夫妻は滞欧中に南仏カップ・マルタンの地を数度に渡り訪れています。北白川宮の紹介で親交を深めることとなった、銀行家アルベール・カーンの別邸があったからです。1924年（大正13）3月に行われた南仏旅行は、往きこそ鉄路で優雅に車窓を眺めながらの旅でしたが、復路はカーン邸から自動車で未舗装の山岳地帯を数百キロ揺られてパリへと戻る大旅行でした。この時に撮影された写真が貼付されたアルバムには、防寒着に身を包み、埃よけのゴーグルを被った一行の精悍な姿が残されています。

朝伯夫妻は1925年（大正14）10月、パリを後にして船上の人となり、アメリカ経由で帰国の途に就きました。初めて目にする大国アメリカの姿は、欧州各国を旅した夫妻にとってもたいへん新鮮に映ったようです。ナイアガラの滝を訪れた允子妃は、ライトアップされた瀑布を見ながら「お金持の国のすることはまたかくべつです」とそのスケール感に圧倒されています。

サンフランシスコから東洋汽船の天洋丸に乗船した夫妻は、1925年12月中旬に横浜港へと入港し、この瞬間「朝伯」夫妻のグランドツアーも終わりを告げました。数多の思い出とともに旅行鞄いっぱいに詰められた土産物の中には、ルネ・ラリックのガラス製花瓶《フォルモーズ》やパリで使用していた銀器類、それにデンマークのロイヤルコペンハーゲン窯で製作された陶製の置物《三羽揃ペリカン（ペンギン）》も含まれていたことでしょう。これらの品々は夫妻の大旅行から90年近く経った今日でも、二人の旅の記憶を鮮やかに伝え続けています。

自動車旅行中の朝伯夫妻 (c)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1 高台より見たニースの景観(f)
2 カーン別邸で和装姿の朝伯夫妻(f)
3 ニースの公園を散策する朝伯の一行(f)
4 自動車旅行中ブルゴーニュ地方サン・フロランタンの街で(f)
5 朝伯夫妻の愛車ボワザン24h.p.(f)
6「コレヨリVoisin歩速ヲ増シテ Parisへ!」(f)

7 サン・ラファエルへ向かう途中で「撮影ノ為メストップ」(f)
8 ローヌ川に架かる橋上でポーズをとる御用掛の相馬孟胤子爵(f)
9 相馬子爵の愛車フィアット20h.p.「南佛ヨリ巴里迄(1200キロ300里)」(f)
10「自動車大旅行ノ第一日(南佛ノ山間)」(f)
11 運転手の横で午睡する相馬子爵と後席の允子妃(f)
12 オートサヴォワ県のフィエール峡谷を訪れた朝伯夫妻(f)

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

1924年（大正13）11月から12月にかけてのイタリア旅行時の写真(c)
イタリア各地を訪れていたことがわかります。

・ローマのコロッセオ(13)
・フォロ・ロマーノ(14-16, 24)
・トラヤヌスの記念柱(17)
・カンピドリオ広場(18)

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

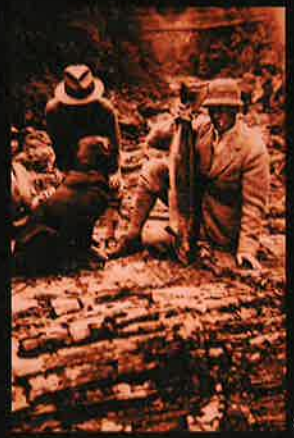
35

36

・サンタンジェロ城(19)
・ティボリのヴィラ・デステの噴水(20)
・フィレンツェのシニョーリア広場(21-22)
・ミケランジェロ広場(23)
・ピッティ宮殿とボーボリ庭園(25-26)
・ヴェネツィアの大運河(27, 34)
・ポンペイの遺跡(28-32)
・ヴェスヴィオ山火口(33, 35)など

37

38


39

40

41

42

37 事故現場を再訪した鳩彦王と激突したアカシアの樹(c)
38 オランダのヴィルヘルミナ女王とともに記念撮影(c)
39 英国旅行でのひとコマ(c)
40 稲葉御用掛、允子妃、相馬子爵、藤岡御付武官、杉岡御用掛(c)
41 ナポレオンゆかりの戦跡を訪れた鳩彦王(c)
42 帰国の途に就いた夫妻を中心に天洋丸の乗客乗員そろって記念撮影(c)

43

44

45

46

47

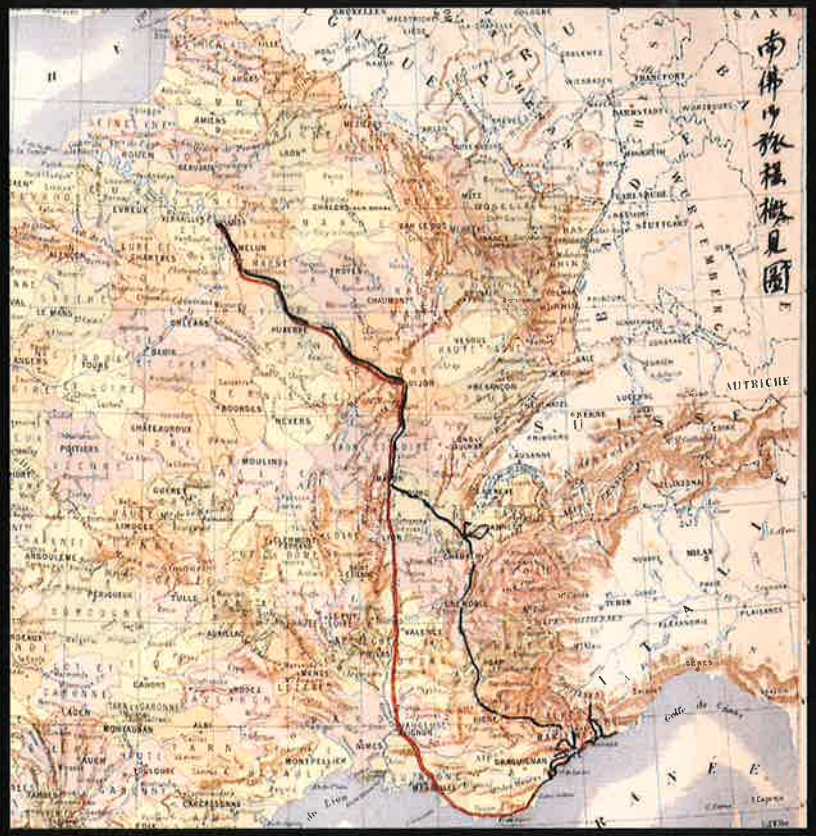
48

43「朝伯」こと朝香宮鳩彦王と允子妃(c)
44 パリのアパルトマンと宮岡御用掛(c)
45 稲葉御用掛、杉岡御用掛、允子妃、鳩彦王看護のフランス人女性(c)
46 フィレンツェの丘上で木の陰から顔を出す杉岡御用掛(c)
47 自動車大旅行中に相馬子爵の車で記念撮影(c)
48 英国旅行に随行中の相馬子爵と杉岡御用掛、藤岡武官(c)

Column 04

御用掛(ごようがかり)の人々－相馬孟胤(たけたね)子爵

朝香宮夫妻とともにグランドツアーを体験した御用掛の人々は、夫妻に代わり金銭の出納管理や日程調整、時には通訳もこなす秘書のような役割を担っていました。鳩彦王には元学習院英語教師の稲葉御用掛と御付武官の藤岡萬蔵中佐が随行し、允子妃には宮岡御用掛と杉岡御用掛が同行、パリ到着後にフランス人のボナール御用掛が現地雇用されました。さらに允子妃の渡欧時、鳩彦王御用掛として宮内省から派遣された相馬子爵が加わりました。旧磐城中村藩主の家系に誕生した相馬孟胤子爵(1889－1936)は、東京帝国大学理学部植物学科を卒業後、宮内省に出仕しました。渡欧時に朝香宮夫妻の影響でゴルフを始め、帰国後はプレーヤーとして活躍する一方、植物学の知識を活かしてゴルフ場に不可欠な常緑芝の研究に没頭し、日本の気候風土でも育つ洋芝を発見したことで知られています。



南仏方面旅行アルバムの内表紙に貼付された「南佛御旅程概見図」。地図中に往路の鉄道（赤線）と復路の自動車（黒線）が記入されています。

Column 05

朝香宮白金新邸建設計画

朝香宮夫妻が残した最も大きな遺品は、現在東京都庭園美術館となっているアール・デコ様式の宮邸です。夫妻の帰国後1931年（昭和6）頃より開始された宮邸新築工事は、皇室関係の建築を担当していた宮内省内匠（たくみ）寮の技師権藤要吉が中心となって進められました。基本的な平面プランはそれまでに建設された他の宮邸に準じていますが、建物を特徴付ける内外装には、当時最先端の装飾様式であったアール・デコが採用されています。これは言うまでもなく、施主である朝香宮夫妻の強い希望が反映されてのことでした。夫妻はパリ時代の経験を元に積極的に意見を述べ、ラパンやラリックのようなフランス人アーティストを起用するという斬新なアイデアを実現させました。1933年（昭和8）5月に完成した新邸への引越し作業に際し、允子妃自らが陣頭指揮を執ったと伝えられています。允子妃は旧邸の蔵や倉庫にあった品々を新邸のどこに置くか、どの倉庫に収納するかといったことを次々に決めて指示していきました。その結果、高輪の旧邸時代には飾る場所もなく倉庫で眠っていた品々が、それぞれところを得てすばらしい家ができあがった、と当時を知る人々は回想しています。今日我々が目にする旧朝香宮邸には、まさに「朝伯」として暮らした夫妻の想い出が、各所にちりばめられています。